にっぽん釜ヶ崎診療所

1965年

一九六三・一月四日本田良賀氏釜ヶ崎で初診室（昔の徳屋会小学校講堂あとの市斤館一階にあった大阪府済生会今宮診療所で）

街を午後歩いてみた。表通はきれいである。裏通りも一見何ということはなさそうだ。ところが一歩なかに踏みこむと、バラック小屋が多い。表はましでも裏から見ると木造のいとも簡単な建築であったりした。

当時未舗装の道路には、ところどころに水がたまり、自転車が走っては泥をはねていた。

昭和三十八年ごろは一合入り二十円から三十円のバクダンがまだあった。警察と協力して各所から集めて、大阪市大医学部の法医学教室で分析ほうり込んで混合したものと思。ていたが、結果はそうではなく、明らかに醸造酒であった。ただし、フーゼル油が多かった。

子どもの「預り屋」もいくつも営業していた。預け代一日二・三百円。

ドヤは、昔は階層式とか抽込み式が多かったらしいが、最近では鉄筋の簡易宿も進出している。

釜ヶ崎の公開演芸会　三月の彼岸の中日、「視の会」の記念祭、愛は愛隣会や西成警察が主催する演芸会が数回開かれる。

診療依頼券　六三年五月末、西成区長、保健所長連名で愛隣地区対策連絡会開催。〃診療依頼券〃を、愛隣会館、労働福祉センター、西成警察、その他の役所関係の施設や民生委員が発行することになる。入院を要す

相談コーナーを通じて行旅病人の形で入院。入院まで行かない方が安静を要する患者を梅田厚生館に収容するようになる。

労働福祉センター　診療所の横の道を北へ約二百メートルいったところに、二階建の西成労働福祉センターがある。三十七年十月に設立され、子どもの施設であった旧四恩学園に大阪府が手を入れて、翌年五月建物ができた。前身は、四条ロータリーの近くに設けられた大阪府労働部分室である。

新しいセンターは裏庭に広場を作り、そこを労働者の寄り場にして運営しようと発足した。いまでは、五千人以上の登録者をかかえ、就労者は夏などは二～三千人の多きを数えている。このため、最初のねらいであったセンター裏庭での就労斡旋は不可能になり、斡旋は昔のまま路上で行われている。当初の五百人から千人という見込みをはるかに上回る人たちが、センターに集ってくるようになったのは、センターの機能が皆が求めるものと一致したからにほかならない。

釜ヶ崎には法による職業紹介施設

すなわち、職安の出張所が別にある。しかし、職安の出張所だけではどうにもならないから、弾力性のある労働福祉センターができたのである。

「ここでは、住民登録がなく職安では扱えない人たちのために、職を捜し仕事を斡旋しているので、厳密にいえば法のアミからこぼれた人たちのための応急処理所なのだ。

センターの職業紹介は、早朝から始まる。仕事は、事務室づきのバスが出向いて事務をとる。この移動事務所たは職業紹介部の人だけでなく厚生部の人も同乗する。厚生部の人は、バスの中で、けが人、病人の手当てをしたり、簡単な投薬をする。

厚生部長は、釜ヶ崎の職安出張所長をしていた吉岡さんである。労働畑の人だ。センターに登録している労働者につもちろん住民登録はない」

社会保険を適用しようと努力され、府の労働部や職安に話をつけて、みごとに成功した。すでに社会保険の被保険者手帳交付者数は一千人以上、受給資格者は二百人をこえている。

としていま、吉岡さんは、最も困難だといわれる失業保険の拡大につとめている。

厚生部では、毎年年末に友の会を開き、越年用の積立貯金をする集りを作っている。一ヶ月の間毎日定額を貯金させて、満期日に奨励金をつけて返すのであるが、この奨励金の利率はなかなか高い。

センターの寮庭は、いまのところ就労には使われてない。夏場になると、アオカンの場になる。公園や路上より安全だと、なかなかの好評で、ゴザをひいたり、新聞紙を敷いて寝ている。世話役もできて、就労時間前には、いつもきちんと清掃されている。

オリンピック　この年は例のオリンピックの年であったが、世紀のオリンピックが開幕するころから、釜ヶ崎に関東から来た人間がぽつぽつふえだした。私の所の患者も異常な増加ぶりを示し、窓口でゴテゴテと異れる人が目立ってきた。おかしいなと思って聞くと、東京で仕事がなくなったからこっちへ移って来たとい

うことである。「釜ヶ崎に行けばなんとかなるといわれて来たのに、なんともならねェヤ」とぼやくぐらいメエ調もいた。今宮診療所の外来患者数の増加だけでなく、労働福祉センターの資料からもこういう事情が浮びあがった。

山谷の人口　ドヤ住みの労働者は、東京オリンピックの行なわれた年の翌年である昭和四〇年一二月の一万五千人を最高に、四四年一万二千六百人、四五年一万八百人、四六年一万四百人、四七年一万二千六百人、四八年一万三百七十八人であったが、四九年には一挙に八千三百九十六人となり以後五〇年八七七六人、五一年八七〇九人、五二年八三四〇人と推移。